

第三十七章 脱線

イリの指示はこうだった。クリーム半島とソシア本国を繋ぐクリーム大橋のソシア側から特急イリ・ライナーをクリーム半島に向かわせてブラックシー艦隊のエリート将校たちの逃亡を阻止しようというものだった。

「少しどころか無謀すぎる」

まず榊が反対する。

「特急ウク・ライナーじゃなくて特急イリ・ライナーを使うのよ。私の勝手でしょ」

榊も加藤も心の中で「マズイ」と叫ぶ。イリの心の中で「独裁者」の卵が孵化したからだ。

「すぐさま実行しなさい」

口調まで独裁者のなっている。

「準備ができたら私は特急イリ・ライナーの運転室に行きます」

もうイリの暴走を止めることはできない。

*

ところが肝心の特急イリ・ライナーはウクライナー共和国の首都キープからイリ王国イリ駅、つまりふるさとに向かっていた。

「キープからクリーム大橋に行くにはどこを通ればいいの」
少しイリに冷静さが戻る。

「うーん」

榊がうなりながら続ける。

「大分遠回りしなければ。もう少し指示が早かったらカシピ海付近を走っていた特急イリ・ライナーを回送すればなんとかなったかも……」

加藤が榊を遮ってささやく。

「時すでに遅しだ。余分なことを言わない方がいい」

しかし、イリには二人の会話が丸聞こえだった。

「使える特急列車はないの！」

「ユーロ・ライナーは無理です」

「ドラゴン・ライナーは？」

「中華民国とソシアは友好国だから無理です」

一瞬イリが考え込むがすぐ切り込む。

「じゃあ、スネーク・ライナーは？ コブラ・ライナーでもいいわよ」

「制御できません。落ち着いてください」

「私は冷静よ。仕方ない。特急ウク・ライナーを使いましょう」

「待ってください。ダレデモスキー大統領に相談しなければ」

「すぐ説得しなさい」

*

「許可が取れました。特急ウク・ライナーはすでにキープ駅を出発して最高速度でカシピ海西側に向かいました」

「初めからそうすれば良かったんだわ」

機嫌が戻ったイリが次の指示を出す。

「クリーム大橋への分岐点に着いたらすぐにクリーム半島に向かわせなさい。どこでもいいから戦車イエロー・タイガーを連結しなさい」

加藤と榊がひっくり返る。

「ちよつと待ってください。いくら何でもそう簡単には……」

「お黙り！ ウイルス族、いえグレーデッドに指示しなさい。彼らなら何とかするはず」

加藤と榊が後ずさりする。二人の力を持つてしても不可能に近い作戦をウイルス族にできるはずがない。しかもこれまで連携したことは一度もない。新疆ウイルス自治領の首都ワクチンの駅のホームで彼らの雰囲気を感じ取った程度の付き合いしかない。それなのにイリは強引とも言える指示、いや命令を発する。

完全にイリはグレーデッドの総統に復帰した。こうなるとウイルス族いわゆるグレーデッド

が従わざるを得ないと加藤も紳も思ったとき、特急ウク・ライナーは戦車イエロー・タイガーを連結することなくクリーム大橋に向かう。並列する自動車道が複数の車線だからか鉄道橋のクリーム大橋は単線である。

クリーム半島から逃亡を企てるソシア軍のブラックシー艦隊司令部そのものを亡き者にする戦略をイリは取ろうとする。だからどうしても強力な攻撃力を持つ戦車が必要だった。しかし、その戦車が確保できない。というよりイエロー・タイガーを操るウィルス族が暗に拒否した。

それならとイリはシールド化されていない脆弱なクリーム大橋を高速で特急ウク・ライナーを走行させようと宇宙戦艦から時空間移動装置で特急に乗り移る。すぐさま運転室に向かう。急に現れたイリを真つ黒な顔を持つ不思議な車掌が追いかける。

「イリ、じゃなかったお客様。運転室は入室禁止です」

イリは無視して運転室に入る。特急ウク・ライナーはさらに加速しながら大橋を上り始める。運転士室のドアの取っ手を握り損ねた車掌は後方に転げる。

クリーム大橋はいくつかの橋が連結されて一つの巨大な橋を構成している。中央の大橋の手前は右にカーブしていて本来は徐行すべき場所だった。立つてられなくなったイリがバランスをくずいて運転手に覆い被さる。その瞬間特急ウク・ライナーに急ブレーキが掛かる。大音響の中大きく揺れる。イリも運転手も正面窓にしたたか頭を打つ。運転室前では後ろ側に転がった車掌の身体が前方に飛ぶ。そして運転室ドアに激しくぶつかる。

特急ウク・ライナーはクリーム大橋のど真ん中で脱線した。